

昭和63年5月号
日本動力協会
"動力"誌

〔談 話 室〕



有澤廣巳先生の世界

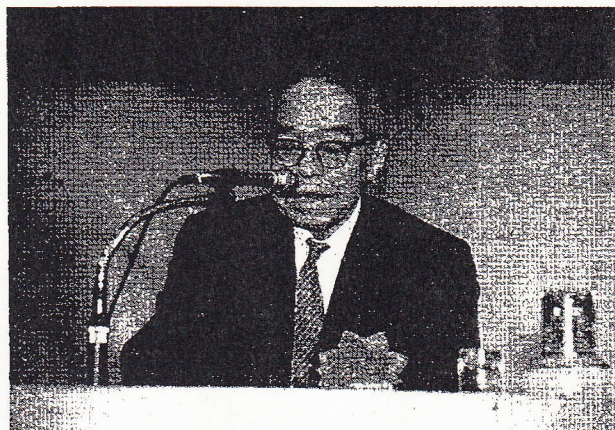
森 一 久*

脚部の疾患に悩まれながらもお元気だった有澤先生が、文字通り卒然と逝去されてはや、2カ月。七々忌を了え、今は緑映える小平霊園に鎮まっておられる。その突然の死を暗示させたのは、うかがうところによると、ご本人自身の口から出た三つの言葉であった。一つは「煙草がまずい」と3日前に。前夜自宅に戻られようとする奥様に「あすは何時にくるの」といつにないお尋ね、それに当日朝「心不全かな…」とのつぶやき。しかし92歳というお齡とあの偉大な足跡に想いをはせるとき、そのご最期は一種凄絶な美を感じさせる。われわれは先生の透徹した識見と不屈の精神の源泉を考え、ご遺志を継ぐよすがといたしたいのであるが、いまは生前のお言葉と行動の中にそれを読みとるほかない立場におかれている。

3月29日午後青山葬儀所で行われた関係9団体による合同葬の導師は、真言宗智山派総本山・高尾山薬王院の山本秀順貫主がつとめられたが、戦時中、有澤先生等は「教授グループ事件」で、貫主は宗教運動の廉で奇しくも時を同じくして獄中に在った。今回脇村義太郎氏のお口添えもあって導師を快諾された。“有澤廣巳大居士”の法名をつけられたのも、ご遺族のご希望を容れられたとはいえ、繁文を好まなかった先生のご人格にふさわしいことと思われる。

前半生の歴史と思想

ワイマール・ドイツの熱気に魅せられ帰国した若く多感な先生を待ちうけていたかのように、世は大恐慌とファシズムの嵐に荒れ狂いはじめた。学問の研讃にはげまれる中での「教授グループ事件」等の経験、さらに戦後の混乱の中にご長女を亡くされるご不幸等、先生の前半生は公私ともに



中国社会科学院より外国人として初めての名誉博士号の受賞式で（昭和60年）

波乱に満ちたものであった。この間に培われ蓄積されたもののの中にこそ、昭和20年東大教授に復職されて以降の、堰を切ったような政治社会におけるご活躍の源泉があったにちがいない。

先生は、いわば二つの世界に同時に住み、理解できる思想の持主であったように思われる。すなわち、すべて物事には能動者と受動者があり、医者と患者、教師と生徒、多数者と少数者…、人の世はこのように構成されているといえよう。F・ダイソン博士は名著『核兵器と人間』を、核兵器軍縮問題を議論することの困難さから説きおこしているが、その中で（この場合）広義の“戦士”と“犠牲者”という“二つの世界”の間の対話の断絶こそ最大の理由と述べている件りがある。同じ人があるときは“戦士”になり、また別のとき“犠牲者”にまわることは珍しくないけれども、同時に両者になることのできた人は、きわめて稀であったと思われる。

経済・社会・福祉・エネルギー等々のほとんどあらゆる分野で、戦後つねに時の政府の意見番で

* Kazuhisa MORI：日本原子力産業会議

あり、政策の根幹を提言しつづけてこられた先生の思想の中には、このような二つの世界の同時性への観照が一本の太い筋として通っていたように私には思われる。それ故にこそ、先生の提案は、時に“改良主義”あるいは“巧妙なる妥協”のように見られたこともあったが、結局はそのいずれもが抜群の先見性と大きな説得力をもって、実行に移されていくことになったのである。

原子力“有澤教書”より

先生が「余生を捧げ」られた原子力分野での活動は贅言を要さない。昭和47年第一次石油危機の前夜、エネルギー対策、原子力開発を国民的立場から推進すべしとする民間各界の合意が盛り上がり、先生自身を座長とした原産体制改革委員会は、原産を高度の中立性をもつ組織に脱皮すべしとした。「今後は書斎の窓から静かに平和利用の成長を見守りたい」と前年原子力委員長代理退任のとき挨拶された先生は、民間各界の強い要請にほだされ、原産会長を引き受けられた。その後、ご逝去に至るまでの14年余のことは、毎年正月の新年名刺交換会で恒例の所感の中から、自身の言葉で語っていただく。

就任のわずか2カ月後に第一次石油危機、翌49年正月には「竹馬の足を切られた日本経済、視界ゼロの新年。原子力は今日を救えないが、将来を切り開く源泉、5～10年後にはかなりの部分を解決できよう」と的確な予言を述べている。昭和50～51年には「むつ」事件等で傾いた「国民の不信を回復するためには開発体制の立直しが先決。気の重いことだが、禍を転じて福となす好機」と関係者を叱咤激励している。電源三法の実現に尽力し、また三木総理の要請をうけて自ら「原子力行政懇談会」の座長となり、原子力委と安全委の分離設置等を提言、原子力発電所トラブル続出で四面楚歌の中にあって抜本的な立直しの先頭に立つ。昭和52～54年にはそのような体制改革が軌道に乗らないことへの焦燥の言葉、「このままでは原子力もわが国のエネルギー危機回避に間に合わない」(52年)「(不況、円高対策などの)目前の問題のみにかまけていては国家百年の計を誤る」(53年)と激しい言葉がつづく。この間、関係者

とともに総理への直言も重ね、54年には安全委発足、「わが国は世界第二の発電国になったが、国際情勢は厳しく(カーター政策)決断を要する仕事が続いている。原子力行政は第二の夜明けを迎えた。基本路線の推進を確信」とやや顔が和んでいる。

そこに54年3月末、スリーマイル島原子力発電所事故発生、「せっかく明るさが見えたのにこれで一挙にふっとび、憤慨にたえない」。つづいて第二次石油危機。「石炭、原子力で石油代替。原子力は自己の努力で、TMIも乗りきれはす。設備利用率は70%を目標に」と激励。

昭和56年には、第二次石油危機(石油価格の急上昇)直後のOPEC指導者の“価格値上げで代替エネルギーを刺激してやっている”との傲言を取り上げ、「挑戦とみるか、自己限界とみるか」と鋭い洞察を加えつつ、「5年が勝負、キャンペーンで国内問題(立地、技術開発)を解決しよう」と訴えている。57年ころやっと石油価格が落ち着き、原子力開発もやや軌道に乗ってきて初めて「昨年は安泰な年」という正月らしい言葉が出た。

58年以降は「途上国とくに中国への協力の責任」と「核燃料サイクル完結への努力、とくに再処理技術確立のため血の通った官民協力体制」を繰り返し訴えてこられた。

最後の年頭所感となった今年1月5日には、INF全廃条約を評価しそれが核兵器廃絶へ発展することを切望し、「兵器にかけてきた努力を平和利用に注ぎこみ、人類をエネルギー問題から解放する競争に転換すべし」と述べ、平和利用開発の「最後の仕上げ」である高レベル廃棄物処分への「熱意不足」をいましめ、またわが国の原子力発電所の高いパフォーマンスはあくまでも信頼性の確保が大前提であることを「もう一度肝に銘じておきたい」と結ばれている。

やさしさとタバコと

先生が誰人ともへだてなくおつき合いになり意見を聞かれたことは周知のことであるが、熱心に世話された多数の中国からの留学生の場合も同じであった。中国社会科学院への“有澤文庫”の寄贈も含め、もっぱらご自身の資金と奔走によるも



留学中には仲間と一緒に野球をドイツ人にの伝受をされたこともあった(大正15年、前列左端が有澤先生)

のだったが、本国の上司からの命令に逆らってまで日本で勉学をつづけたいとする留学生が現れたりすると、目を細めて親身の世話をやかれた。そんなとき私は、先生の思想の一端を垣間見る思いがしたものである。

しまい一言、「先生とタバコ」の件につき、先生のため弁じたい。そのヘビー・スモーカーぶりは、「タバコたたき」の風潮の中で一種の爽快感をもって語られてきた。しかし最近うかがったお話では、これには一つの因縁話がある。以前先生が足を傷められたとき、大変治りが遅かったことがあった。そのときある若い医師に、「先生これは、いずれタバコを切るか、足を切るかになるかもしれませんよ」といわれた。時はすぎ今年2月、先生にとって最後の入院となったその日、偶然にも日赤センターの玄関先で、何年ぶりかでその医師にばったり再会された。「有澤先生、どうなさいました……」。

やはり、先生のなさってきたことは、生半可なことでは理解の外との感を深めつつ、ここに私の拙ない文章を先生に捧げるものである。 合掌